

太田郡昔話

塚山湖

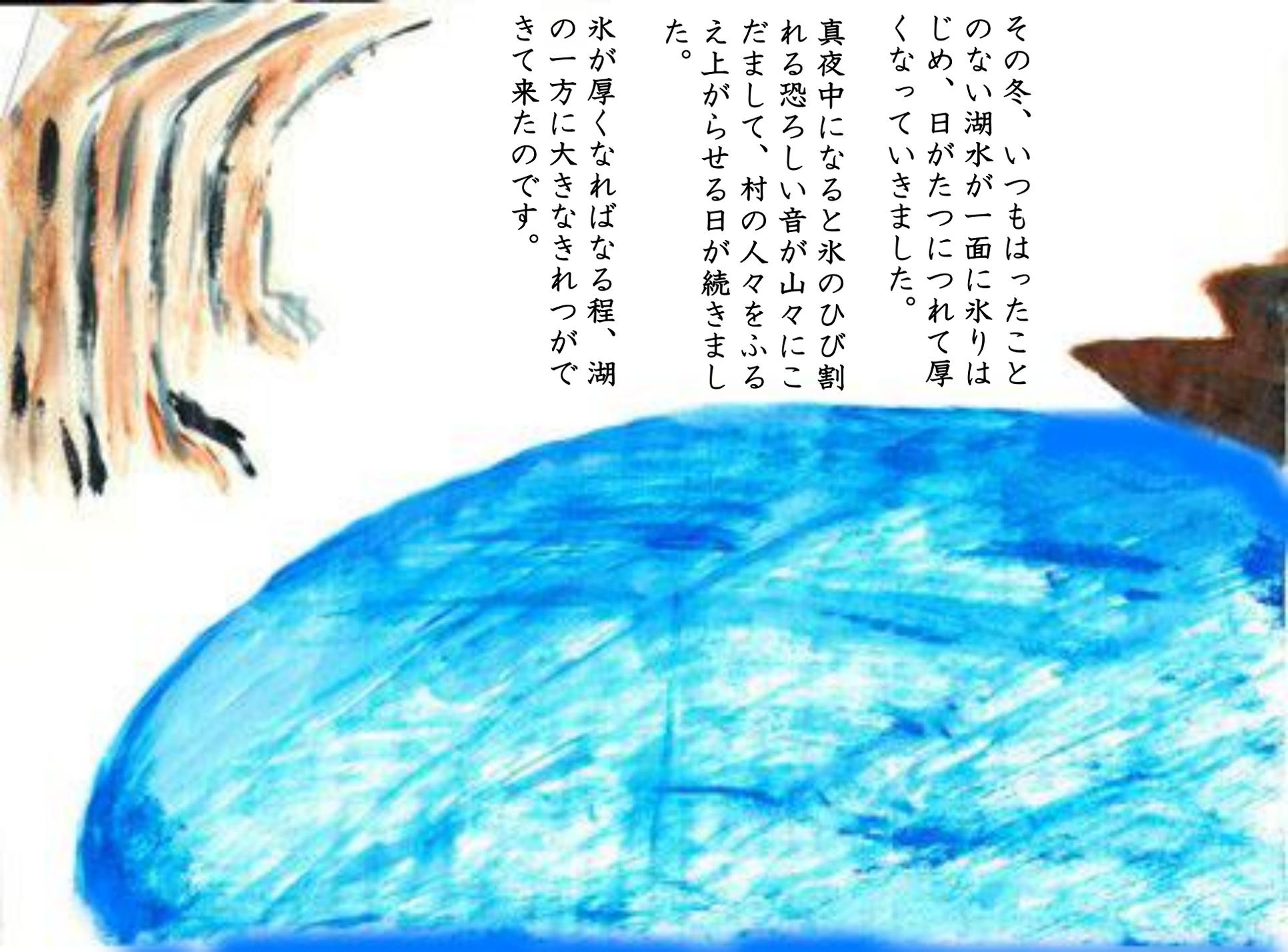
昔、塚山にある大塚神社の横に湖がありました。一まわり、ニキロメートルほどの小さなものですが、高い山中腹にあり、湖面はいつも鏡のようにすみ、波も立たず、底知れぬ深さと、魚類の姿など一つも見られぬ神秘的な湖でした。この湖水からわき出す水は歩浴い沢水となり、木の陰をぬけ、岩の下をくぐりぬけ、夏は冷たく、冬暖かくこのあたりに住む人の大切な飲み水として使われていました。

ある年のこと。
「塚山の湖に、
だいじゃが水浴び
をしていた。」
「大塚神社のお使
いは、大きな
白へびで
夏の暑い日など、
湖で水浴びをして
いる。」

「湖水のまんなか
ら、だいじゃが頭
を出していた。」
などというわさ
が立ちはじめまし
た。

うわさが広まる
につれ、土地の
人々は、気味悪が
りだんだん堀の沢
の水は使われなく
なってきたのです。

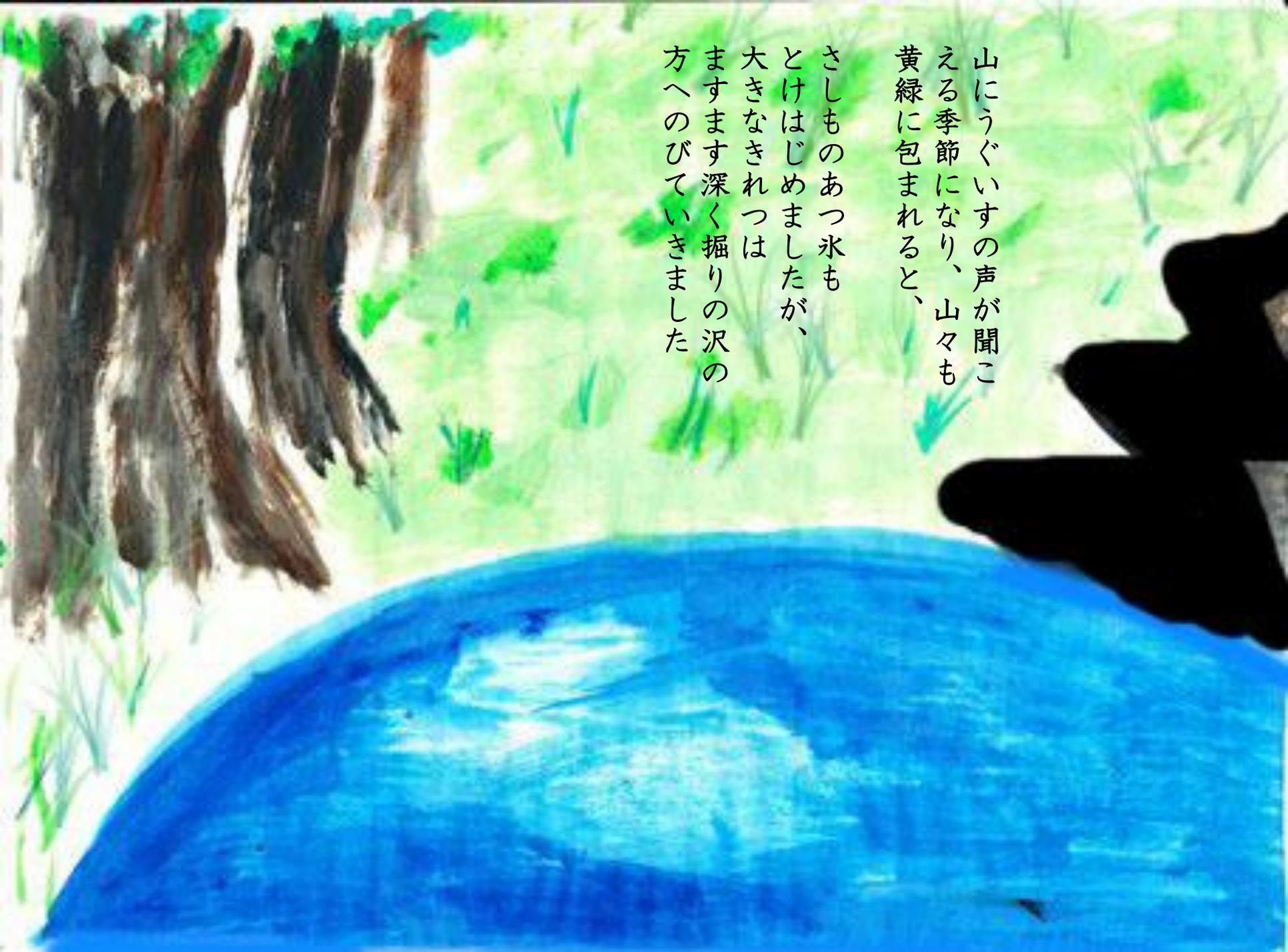




その冬、いつもはったことのない湖水が一面に氷りはじめ、日がたつにつれて厚くなっていきました。

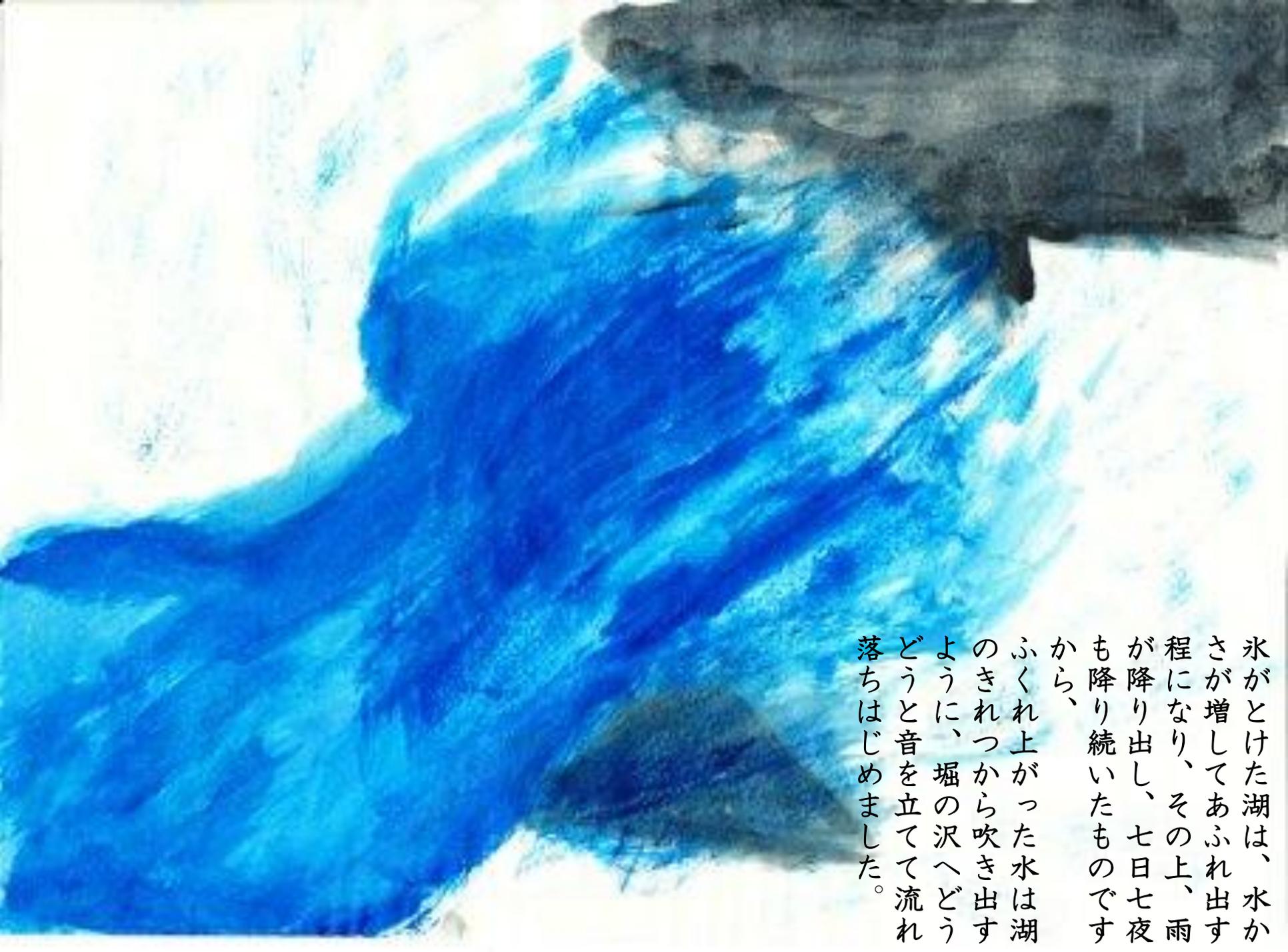
真夜中になると氷のひび割れる恐ろしい音が山々にこだまして、村の人々をふるえ上がらせる日が続きました。

氷が厚くなればなる程、湖の一方に大きなきれつができて来たのです。



山にうぐいすの声が聞こ
える季節になり、山々も
黄緑に包まれると、

さしものあつ氷も
とけはじめましたが、
大きなきれつは
ますます深く掘りの沢の
方へのびていきました



氷がとけた湖は、水か
さが増してあふれ出す
程になり、その上、雨
が降り出し、七日七夜
も降り続いたものです
から、
ふくれ上がった水は湖
のきれつから吹き出す
ように、堀の沢へどう
どうと音を立てて流れ
落ちはじめました。



八日目の朝、雨はぴたと
とやみましたが強い風が
木々をゆすり始め、
黒雲は太田部全体を
すっぽりと包み込め、
雷鳴はとどろきわたり、
うずまく黒雲を引きさく
ようないな光が走り始め
たのです。
どんよりした湖水は波立
ちさわぎ、狂ったような
大波が岸辺をたたきつけ
ます。

大きく口を開けたきれつから
水はたきのように
落下しました。

その時です。

湖水の真ん中
が大きくあわ
立ちはじめ、
まっふたつに
割れたかと思
うと、四斗だ
るほどもある
だいじゃが
頭を出し、
点をふりあお
ぎ炎のような
真っ赤口を開
け、すさまじ
いうなり声を
上げたのです。



かみなりの音が天
をとどろかせた時、
岸部は切りさかれ、
うずまいた
だくりゆうは
堀の沢をつき破る
いきおいとなって
流れ落ちました。



A green dragon-like creature with yellow horns is swimming in blue water. The creature has a green body with yellow stripes and yellow horns. It is swimming towards the right. The water is blue and white with some bubbles.

だいじやはそれをまっぺ
いたかのようにな姿を変え
ました。

頭に大きな角がはえ、口から火
を吹きながら
湖水の水といっしょに堀の沢を、
流れおりていったのです。



湖の水がなくなる時には、
空は青空が広がり暖かい
陽ざしが塚山を照らし
はじめました。

だいじゃが、りゅうになり
流れ下った堀の沢は、
大きな樹木で突きけずった
ような一直線の広い堀に
なっていました。

その後、湖水はなくなり
塚山の神社におまいるひ
ともだんだんとへって、

今では参道の石どうろうだ
けがさみしく残っているだ
けです。

